

神木坂古墳群 III

榛原町文化財調査報告 第4集

1989

榛原町教育委員会

神木坂古墳群 III

榛原町文化財調査報告 第4集

1989

榛原町教育委員会

序 文

神木坂古墳群は、土地区画整理事業にともなって昭和59年度以降、4次にわたる発掘調査を実施し、その存在が明確になった遺跡です。1次から3次の調査結果は、すでに『神木坂古墳群』、『神木坂古墳群』Ⅱとしてまとめています。本書は、昭和63年度に行った4次調査の結果を『神木坂古墳群』Ⅲ（棟原町文化財調査報告第4集）として刊行するものです。

本書が先に刊行いたしました報告書とあわせて、今後の調査・研究に資するところがあれば幸いに存じます。

最後に、調査を実施するにあたり、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所をはじめ、関係諸機関ならびに地元関係各位の御協力に対し、深甚の謝意を表します。

平成元年2月

棟原町教育委員会

教育長 西 田 懐 也

例　　言

- 1 本書は、奈良県宇陀郡株原町大字萩原、下井足に位置する神木坂古墳群の4次発掘調査報告書である。
- 2 調査は、株原町役場の依頼をうけて株原町教育委員会が実施し、現地調査は株原町教育委員会技師 柳沢一宏があたった。
- 3 本書の造構名は、すでに発行している『神木坂古墳群』に順じた名称を使用しており、造構一覧表を第3章第2節に掲載した。
- 4 本書の方位は、図1～4の真北を除いてすべて磁北である。
- 5 本書の執筆、編集は柳沢が担当した。

目 次

第1章 調査の契機と経過.....	1
第1節 調査の契機と経過.....	1
第2節 調査日誌抄.....	2
第2章 位置と環境.....	3
第1節 地理的環境.....	3
第2節 歴史的環境.....	3
第3章 遺跡の地形と遺構・遺物の検出状況.....	5
第1節 地形.....	5
第2節 遺構・遺物の検出状況.....	5
第4章 遺跡の調査	
第1節 神木坂南尾根地区.....	10
1 位置と現状 2 調査の概要 3 検出遺構	
4 出土遺物 5 小結	
第5章 ま と め.....	15
付 載 神木坂遺跡採集の土器.....	16

第1章 調査の契機と経過

第1節 調査の契機と経過

棟原は大阪方面への通勤に比較的至便なことから、近鉄大阪線、国道165号線に沿っていくつもの宅地造成等の土木工事が進められている。すでに、大小さまざまな造成工事が実施されており、今後もその勢いはとどまるところを知らない。

現在、棟原町では近鉄棟原駅北側の開発を目的とした土地区画整理事業（事業名 大和都市計画事業 棟原駅北特定土地区画整理事業）が実施されており、これまでに、事業地内で3次にわたる埋蔵文化財の発掘調査を実施している。^註1984年9月から1985年1月に神木坂1号墳、ドタニ遺跡等の調査（1次調査）、1986年3月から4月に神木坂西尾根地区的調査（2次調査）、1986年9月から1987年1月には神木坂2号墳、3号墳等の調査（3次調査）を行い、その後、本格的な造成工事が開始された。

1次調査の際、神木坂1号墳が位置する尾根先端（南端）に古墳状隆起を確認したものの、直接、土取り等の工事が行われないため発掘調査を実施しなかった。その後、古墳状隆起南側に鎮座する神社とともに整地の対象地となつたため、奈良県教育委員会、棟原町教育委員会、棟原町役場（開発部）がこの遺跡の取り扱い、調査の実施方法等について協議を行つた。この結果、発掘調査は棟原町教育委員会が担当し、重要な遺構、遺物等が発見されれば、その保存等について改めて協議を重ねることとなった。

発掘調査は1988年6月26日から7月22日にかけて実施し、この経過については次節、結果については第4章を参照されたい。

調査にあたつては、棟原町役場駅北開発事務所の諸氏をはじめ、村本建設株式会社の方々に多大な御協力、御援助をいただいた。現地調査から遺物整理、報告書刊行に至るまでの関係者等の芳名を次に記し、謝意にかえた。（敬称略）

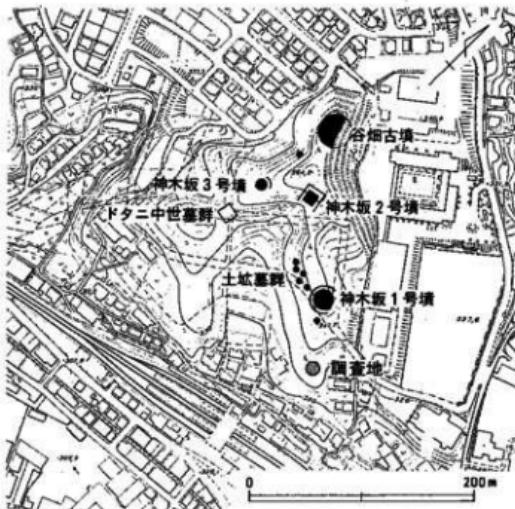


図1 神木坂古墳群位置図

調査指導 奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所

事務局 橿原町役場 開発部 駅北開発事務所

調査作業員 角岡キミヨ、森本君子

調査補助員 坂本貞子、杉本淳子、植田育子

調査協力者 村本建設株式会社

註)これまでの調査結果については、松田真一ほか『神木坂古墳群』 橿原町教育委員会 1986、

柳沢一宏『神木坂古墳群』Ⅱ 橿原町教育委員会 1988 に詳しい。

第2節 調査日誌抄

4次調査

1988年（昭和63年）	第2トレンチ掘り下げ作業
6月26日（日）晴	第3トレンチ掘り下げ開始
午後、調査予定地の草刈り・器材搬入	7月4日（月）晴
6月27日（月）雨のち曇	第1～第3トレンチの精査
歛靈祭	第4トレンチ設定。南端で土坑を検出
雨のため作業中止	7月5日（火）晴
6月28日（火）晴時々曇	第1トレンチ遺構検出作業
調査前の写真撮影、測量杭の設置	7月6日（水）晴
6月29日（水）曇のち雨	第2トレンチ掘り下げ
調査前の地形測量。午後降雨のため作業中止	第4トレンチ遺構写真撮影。実測図作成。調査
6月30日（木）曇時々雨	地全景写真撮影
第2トレンチ掘り下げ開始。午後降雨のため作業中止	7月7日（木）晴
7月1日（金）雨のち晴	第1～第4トレンチ、土層断面図作成
第1トレンチ掘り下げ開始。須恵器、土製品出土	第2、第4トレンチ、土層断面写真撮影
	S K-48を検出。実測図作成
	調査地平板測量
	7月8日（金）晴
	S K-48写真撮影
	器材撤収
	7月22日（金）晴
	調査地周辺の航空写真撮影



写真1 作業風景

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

株原町は奈良盆地の東方に広がる高原（山間）部の一角に位置し、山々の間をねって流れる宇陀川・芳野川などの河川に沿って、いくつもの小盆地、谷地形が形成されている。

神木坂古墳群は、宇陀川左岸の北から南へと派生する尾根上に位置し、ここからは株原の市街地をはじめ、口宇陀地方を一望できる。今回、調査を実施した古墳状隆起は、神木坂1号墳からさらに南東へのびる尾根先端に位置し、あたかも、株原駅へと迫っているかのようである。



図2 株原町位置図

第2節 歴史的環境

口宇陀を流れる宇陀川・芳野川流域には、多くの遺跡が存在している。これらの流域では近年、宅地造成、農地造成等をはじめとする開発事業が実施され、生活環境は大きく変わりつつある。このような状況のもと、山野は大きく景観を変え、徐々に遺跡はその姿を消し、調査記録だけが残されている。

神木坂古墳群の周辺でも多くの遺跡が確認されとおり、同一丘陵上だけでもキトラ遺跡、谷畠中世墓地、谷畠古墳などの存在が知られている。

また、株原は『古事記』、『日本書紀』をはじめとする多くの文献に度々登場し、今に伝える地名、伝承なども多い。中・近世には伊勢街道の宿場町として栄え、多くの人々が往来したといわれている。各所にこの頃の道標、灯籠などが点在し、当時の面影を今に残している。

註) 菅谷文則他『丹切古墳群』 奈良県教育委員会 1975

伊藤勇輔他『大王山遺跡』 株原町教育委員会 1977

広吉寿彦他『伊勢本街道』 奈良県教育委員会 1985

補元哲夫他『能峰遺跡群』I 奈良県教育委員会 1986



写真2 調査地南側の稻荷社



図3 神木坂古墳群周辺遺跡分布図

第3章 遺跡の地形と遺構・遺物の検出状況

第1節 地 形

神木坂古墳群の周辺は開発が著しく、大きく地形が改変されてしまった。かつて西峠地区から神木坂古墳群へとのびる尾根が存在し、榛原町大字荻原と同大字下井足とを分ける境界となっていたが、今はそれをうがうことはできない。

標高366mの最高所には、谷畑古墳が位置し、ここから南東方向にのびる尾根の最先端部が今回の調査対象地となったものである。



写真3 空からみた調査地

第2節 遺構・遺物の検出状況

4次にわたる調査で尾根上からは、縄文時代から近世・近代に至る遺構・遺物を確認しているが、本調査地では若干の土坑と遺物を検出したのみである。これまでに確認した遺構・遺物は表1にまとめてるので参照されたい。



図4 神木坂古墳群地形測量図

表1 神木板遺跡群遺構一覧表

遺構名	時代	概要
1号墳	古墳	円墳、径16m、高2.5m、周溝、割竹形木棺2、箱形木棺1、不明木棺1
2号墳	古墳	方墳、一辺15m、周溝、横穴式石室(磚椁式石室)
3号墳	古墳	横穴式石室
土塙墓1	古墳	土塙墓、周溝
土塙墓2	古墳	土塙墓、周溝
土塙墓3	古墳	土塙墓
土塙墓4	古墳	土塙墓、周溝
土塙墓5	古墳	土塙墓
土塙墓6	古墳	土塙墓、周溝
土塙墓7	古墳	土塙墓、周溝
SK-01	?	楕円形土坑
SK-02	奈良	土器棺
SK-03	平安	木棺墓(木櫬墓)
SK-04	?	方形土坑
SK-05	?	円形土坑
SK-06	?	円形土坑、焼土
SK-07	?	円形土坑、焼土
SK-08	?	円形土坑
SK-09	中世?	土葬墓?
SK-10	奈良	土器棺
SK-11	?	楕円形土坑
SK-12	奈良	火葬墓?
SK-13	?	楕円形土坑、焼土
SK-14	室町	円形土坑
SK-15	?	円形土坑
尾根5・6区ピット群	?	円形土坑
SK-21	古墳	円形土坑
SK-22	?	楕丸方形土坑
ドタニ遺跡ピット群	?	ピット
23号墓(SK-23)	室町	円形土坑、火葬施設
24号墓(SK-24)	室町	楕円形土坑、火葬施設
25号墓(SK-25)	室町	円形土坑、火葬施設
26号墓(SK-26)	室町	円形土坑、火葬施設
27号墓(SK-27)	室町	楕円形土坑、火葬施設
28号墓(SK-28)	室町	円形土坑、火葬施設

遺物	調査	備考
須恵器、土師器、鉄刀、鉄鎌、鉄鎌、切子玉、環玉他	1次調査	
須恵器、土師器、金環、鉄釘他	3次調査	移築
須恵器、土師器、新羅土器、鉄釘他	3次調査	移築
	1次調査	
鉄刀子	1次調査	
須恵器、鉄刀子	1次調査	
須恵器	1次調査	
鉄刀子、鍍環	1次調査	
	1次調査	
	3次調査	
	1次調査	
土師器(杯、甕)	1次調査	
八棱鏡、灰釉壺、鉄釘	1次調査	
	1次調査	
	1次調査	
炭	1次調査	
炭	1次調査	
	1次調査	
	1次調査	
土師器(甕)	1次調査	
土師器	1次調査	
土師器(皿)	1次調査	
土師器(皿)	1次調査	
土師器(土釜)	1次調査	
	1次調査	
	1次調査	
須恵器	1次調査	
土師器	1次調査	
	1次調査	
炭、人骨	1次調査	
炭、人骨、土師器	1次調査	
炭、人骨	1次調査	
炭、人骨	1次調査	
炭、人骨	1次調査	
炭、人骨、土師器	1次調査	

遺構名	時代	概要
29-1号墓(SK-29)	室町	円形土塚、火葬施設
29-2号墓(SK-29)	室町	楕円形土塚、土葬墓、桶状棺
30号墓(SK-30)	室町	楕円形土塚、火葬施設
31号墓(SK-31)	室町	楕円形土塚、火葬施設
32号墓(SK-32)	室町	円形土塚、火葬施設
33号墓(SK-33)	室町	隅丸長方形土塚、土葬墓
34号墓(SK-34)	室町	楕円形土塚?、土葬墓
35号墓(SK-35)	室町	隅丸長方形土塚、土葬墓
36号墓(SK-36)	室町	長方形土塚、火葬施設
37号墓(SK-37)	室町	円形土塚、火葬施設
38号墓(SK-38)	室町	円形土塚、土葬墓
39号墓(SK-39)	室町	楕円形土塚、土葬墓
40号墓(SK-40)	室町	長方形土塚、土葬墓
41号墓(SK-41)	室町	長方形土塚、土葬墓
S K - 4 2	室町	円形土坑
S K - 4 3	?	円形土坑
S K - 4 4	?	円形土坑
S K - 4 5	?	方形容土坑(落ち込み状遺構)
S K - 4 6	?	円形土坑
S K - 4 7	?	円形土坑
S K - 4 8	室町	円形土塚

(参考)

谷烟古墳	古墳	円墳、径30m、箱形木棺
谷烟古墳中世墳墓	室町	楕円形土塚、火葬骨埋納墓、外部表象(石組み)
谷烟古墳牛骨埋納塚	?	楕円形土塚

遺物	調査	備考
炭、人骨、土師器	1次調査	
人骨	1次調査	
炭、人骨、土師器	1次調査	
炭、人骨	3次調査	
炭	3次調査	
人骨	3次調査	
人骨	3次調査	
鉄釘、人骨	3次調査	
炭、人骨	3次調査	
炭、人骨	3次調査	
人骨	3次調査	
人骨	3次調査	
	3次調査	
	3次調査	
	3次調査	
炭	3次調査	
炭	3次調査	
	3次調査	
	4次調査	
	4次調査	
須恵器(壺)、黒色土器(瓶)、瓦器(瓶)、土師器(皿)	4次調査	

※ 1次調査=1984年 3次調査=1986年 4次調査=1988年

内行花文鏡、筒形銅器、鉄刀、鉄劍、 鉄鎌、鉄錐、鉄錐、鉄斧、ノミなど	1972年調査	保存
土師器(土釜)	1972年調査	
牛骨	1972年調査	

第4章 遺跡の調査

第1節 神木坂南尾根地区

1. 位置と現状(図5、図版1・2)

谷畑古墳、神木坂2号・3号墳が築かれている主丘陵から南東方向に約12mの比高をもつて下る尾根が派生し、その先端部に神木坂1号墳が位置する。ここから、さらに南へと下る急峻な尾根があり、この最先端に古墳状隆起が認められ、1号墳との比高差は約15mである。この急峻な尾根はかつての畠等の耕作により1号墳裾から4段の傾斜面が形成されており、上3段は1984年の1次調査の際、調査を実施している。今回、調査対象としたのは、最下段の傾斜面とこの南側に位置する古墳状隆起である。

古墳状隆起の南側と西側は、稻荷神社とその敷地造成により大きく削り取られ、東側も自然崩壊が進んでいる。現状の地形では径8~10m、高さ1m程度の円墳状を呈している。

なお、この4次調査地を神木坂南尾根地区と呼称する。

2. 調査の概要(図5~7、図版3~5)

尾根筋に直交するトレンチ、平行するトレンチをそれぞれ2本ずつ設定し、南側から順に第1・第2・第3・第4トレンチと呼称することとする。

第1トレンチ(5.5m×1.2m)、第2トレンチ(5m×1.6m)、第3トレンチ(2m×1m)の基本層序は腐植土(第1層)、淡黄褐色土(第2層)、黄茶色土(第3層)、地山となっている。なお、第3トレンチには、第3層は認められない。第4トレンチ(4m×1.6m)は腐植土(第1層)、褐色砂質土(第2層)、地山の順となっており、第2層は以前の耕作土と思われる。各トレンチとも地表から20~40cmの深さで地山面に至り、第2・第4トレンチから土坑を検出している。

また、第1・第2・第3トレンチの第2層~第3層から須恵器・土師器・陶器・獸形土製品、第4トレンチの第2層から土師器が出土している。

3. 検出遺構

第2トレンチのなかほどからSK-48、第4トレンチの南端でSK-46、SK-47の一部を検出しておらず、以下、その概要を述べる。

SK-46(図8、図版3)

直径50cm、深さ25cmをはかる円形の土坑である。土坑は地山を穿って形成されており、埋土は固くしまった淡褐色土である。土坑底は丸くなってしまい、この断面形態はU字形を呈する。時期を明らかにできるような遺物は認められない。

SK-47(図8、図版3)

地山を穿って形成された深さ9cmの土坑であるが、そのほとんどが調査範囲外に及んでいるた

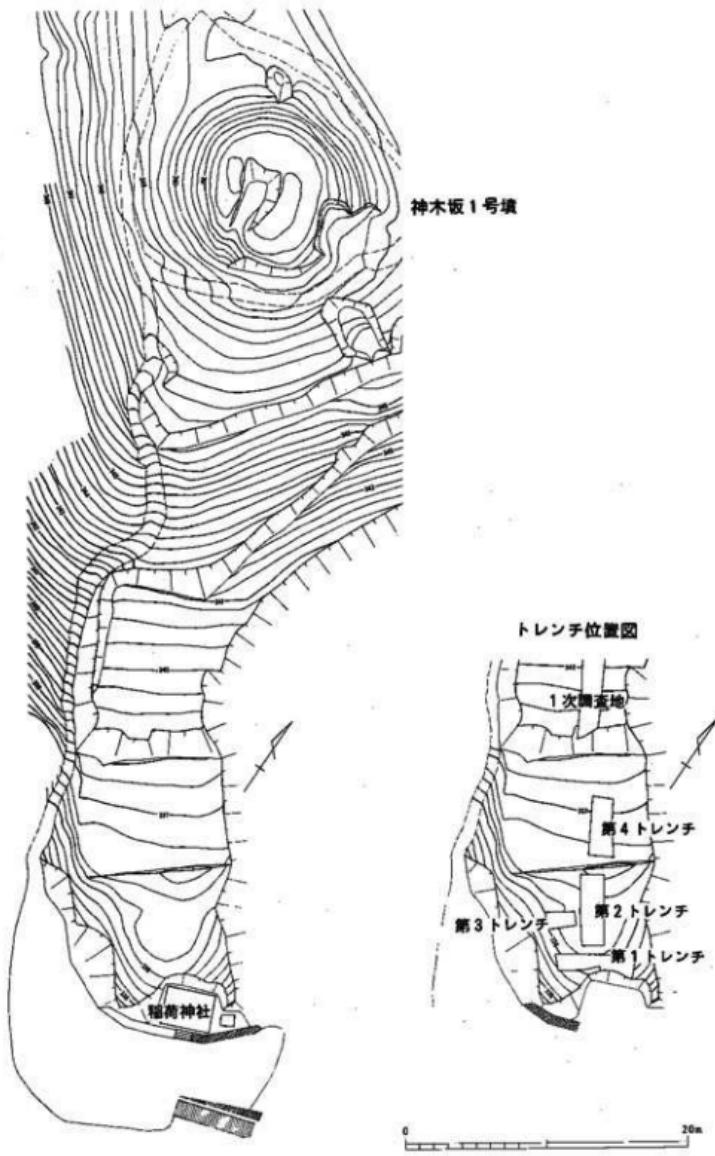


図5 柿木坂南尾根地区地形測量図

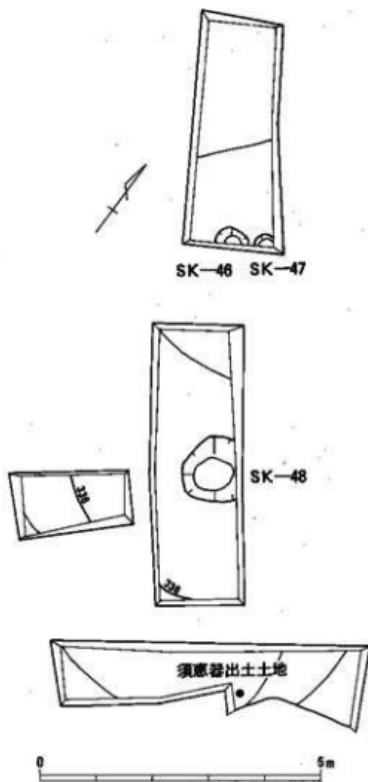


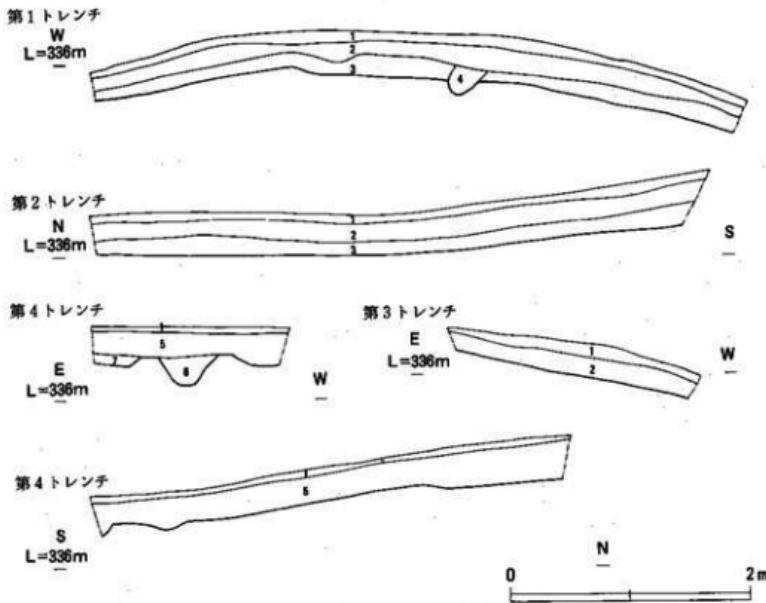
図6 神木坂南尾根地区調査測量図(25cmコンタ)

め、明確な形態、規模等は明らかでない。現状から直徑約50cmの円形ないし、梢円形を呈すると推定される。土坑の断面形態はU字形を呈する。暗茶色土の埋土中から遺物は出土していない。

SK-48(図8、図版4)

直徑110~120cm、深さ11~16cmの規模をはかる、ややいびつな円形土坑である。

他の土坑と同様、地山を穿って形成されている。土坑底はほぼ平坦となっており、土坑の断面形態は皿状を呈する。暗茶色の埋土中からは須恵器(甕)、黑色土器(椀)、瓦器(椀)、土師器(皿)の各細片が少量出土している。



1. 腐植土 2. 淡黄褐色土 3. 黄茶色土 4. 暗茶色土 (SK-46)
5. 棕色砂質土
6. 淡褐色土 (SK-46) 7. 暗茶色土 (SK-47)

図7 神木坂南尾根地区土層断面図

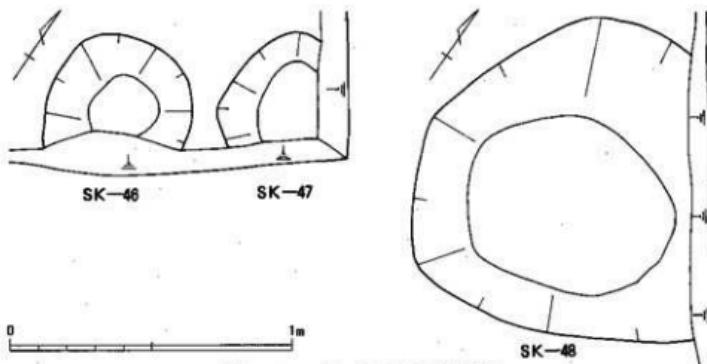


図8 SK-46・47・48平面実測図

4. 出土遺物

先述のとおり、古墳時代から近世に至る土器等が出土しているが、ほとんどが細片のため、図示できるものは少ない。なお、これらの出土遺物の種類等は、表2を参照されたい。

須恵器 杯蓋(図9、図版6)

第1トレンチの第3層から出土した破片で、天井部を中心に約1/3が残る。復原口径15cm、器高4cmをはかるが、やや歪みが認められる。天井部と口縁部とを区切る稜は、やや突出するものの短く、鋭さを欠いている。口縁部は内彎気味にハの字形にのびる。口縁端部は内傾する段を有するが、やや鋭さを欠く。天井部は丸味をおびるが、扁平な感を呈する。成形はマキアゲ、ミズビキにより、天井部外面に回転ヘラ削り調整、天井部内面中央に一定方向のナデ(仕上げナデ)、その他には内外面とも回転ナデ調整を施す。この際のロクロの回転方向は右方向を示している。色調は外面ともに灰色を呈し、胎土は1~2mmの白色砂粒を含むもののが多い。焼成は良好、堅緻である。天井部外面の一部には、暗オリーブ色の自然釉の剥離が認められる。

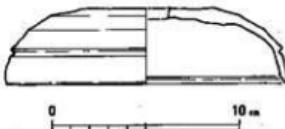


図9 神木坂南尾根地区出土遺物実測図

表2 神木坂遺跡 4次調査出土遺物一覧表

出 土 位 置	遺 物 名	図	図 版	備 考
第1トレンチ	須恵器(杯蓋) 陶器(小瓶) 獸形土製品(狐)	9 6 6	6	胸部、脚部
第2トレンチ	須恵器(杯) 土師器(皿、土釜) 陶器(甕) 獸形土製品(狐)			
第3トレンチ	土師器(皿)			
第4トレンチ	土師器(皿)			
SK-48(第2トレンチ内)	須恵器(甕) 黒色土器(碗) 瓦器(碗) 土師器(皿)			

5. 小 緒

古墳状隆起の中心部とその背後(北側)にトレンチを設定したところ、3基の土坑と若干の遺物を検出した。土坑の明確な時期は明らかでないが、SK-48内からは中世土器片が少量出土している。第1トレンチ内から出土した須恵器 杯蓋は中村編年のII型式第1段階、田辺編年のMT15型式に比定される。獸形土製品は狐と推定され、稻荷神社の背後で比較的多く出土しており、これにともなったもの可能性が考えられる。

第5章 まとめ

神木坂1号墳から南方へ伸びる尾根の最先端部に古墳の存在も考えられたので、調査を実施した。この結果、3基の土坑を検出したものの、古墳時代までさかのぼる遺構ではなかった。隆起部の中央およびその背後に遺構の存在を予想して精査を重ねたが、埋葬施設や周溝等の遺構は認められなかつた。また、第1トレンチ出土の須恵器・杯蓋は6世紀初頭のものであるが、遺構とともになうものではなかつた。

1984年から4次にわたる発掘調査を実施し、神木坂の尾根上からは数多くの遺構、遺物を検出することができた。しかし、残念ながらいずれも遺構の現状保存は困難との見解に至つたため、「記録保存」という形をとつてゐる。先に刊行している『神木坂古墳群』、『神木坂古墳群』II、そして本書で神木坂古墳群の発掘調査を閉じることとしたい。

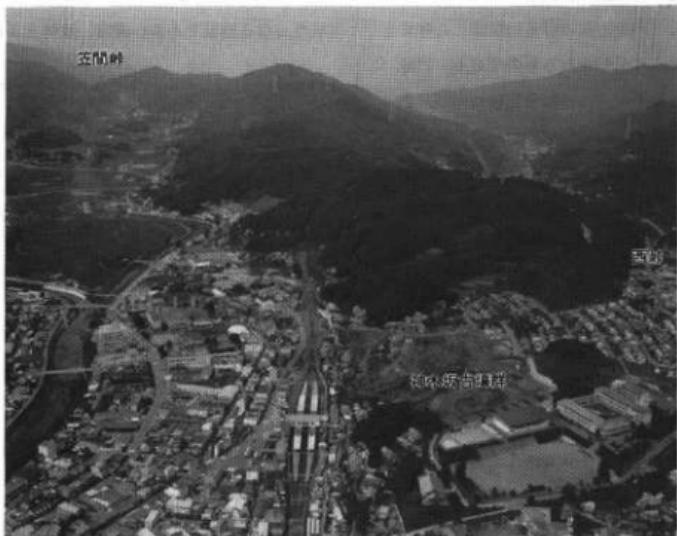


写真4 神木坂古墳群跡上空からの眺望

付 載 神木坂遺跡採集の土器

1. はじめに

神木坂南尾根地区の発掘調査（4次調査）を開始した1988年6月は、すでに神木坂の尾根で造成工事が進んでおり、露出した風化花崗岩の地山がかつての面影をわずかに残すのみであった。4次調査中に工事地内の各所を踏査したところ、須恵器片3点、黒色土器片1点を採集した。すでに土砂移動が進んでいたなかでの発見のため、正確な位置は明らかでないが、いずれも、かつて神木坂1号墳が築かれていた周辺での採集である。4次調査地とも近いことから、この機会にあわせて報告したい。（写真5）

2. 採集土器

須恵器 杯身

受部の小破片である。口縁部は欠損し、詳細は不明である。破面はいずれも古い時期のものである。

須恵器 鉢（図10、図版6）

内側して内上方にのびる口縁部と丸味をおびた尖底からなる器種である。通常、鉄鉢とよばれており、鉢Aに分類されるものである。口縁端部は、やや上方にひねり気味にのび、平坦におさめる。約1%の破片が残り、復原口径19.4cm、復原体部最大径20.6cm、現存高7.7cmをはかる。内面は粗い回転ナデ調整ののち、下半を丁寧な回転ナデ調整、ナデ調整を施す。外面には横向方向のヘラミガキ（原体幅4mm）を施し、底部付近は回転ヘラ削り調整が認められる。内外面とも暗青灰色を呈し、胎土は精良、焼成は堅敏である。ロクロの回転方向は右方向と考えられる。

須恵器 番種不明

小片であるが、厚さ1.1～1.2cmをはかる。内外面ともナデ調整が施されている。

黒色土器 槌

炭素吸着により内外面とも黒色を呈する口縁部の小片である。詳細は明らかでない。

3. 小 結

採集した土器片は、本来、どのような状態で埋蔵されていたかは明らかでない。

須恵器 杯身片は神木坂1号墳にともなった遺物の可能性が強く、盗掘時に尾根斜面などへ搔き出されたものとも推定できる。須恵器 鉢は8世紀後半の時期と考えられるが、遺構にともなった

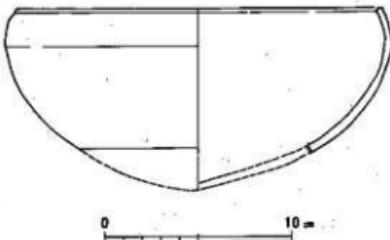


図10 神木坂遺跡採集遺物実測図

ものかどうかは明らかでない。

註1) 奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告』VII 1976

2) 新しい破面も認められ、本来はもう少し大きかったと思われる。



写真5 谷畠古墳から見た神木坂1号墳跡
(背後の森が4次調査地)

図 版



3次調査後の神木坂古墳群



4次調査後の神木坂古墳群



調査前の南尾根地区（北から）



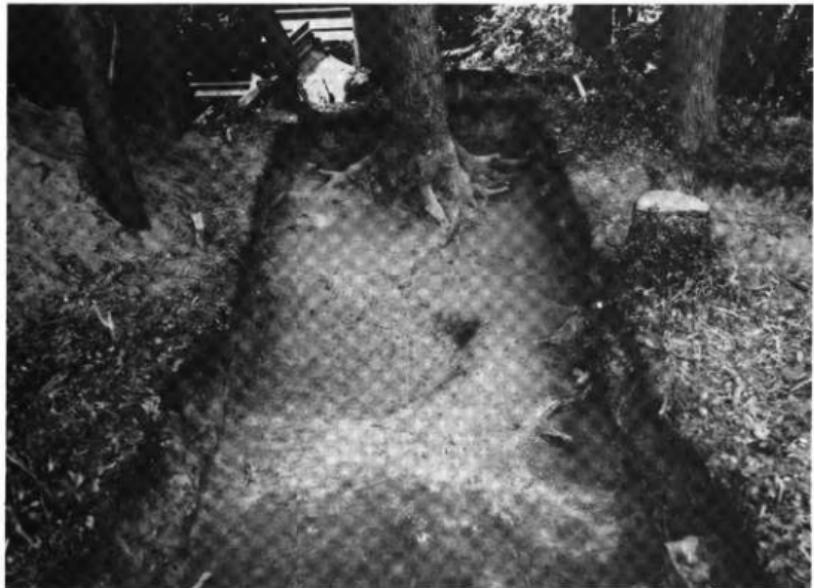
調査前の南尾根地区（南から）



調査後の南尾根地区（北から）



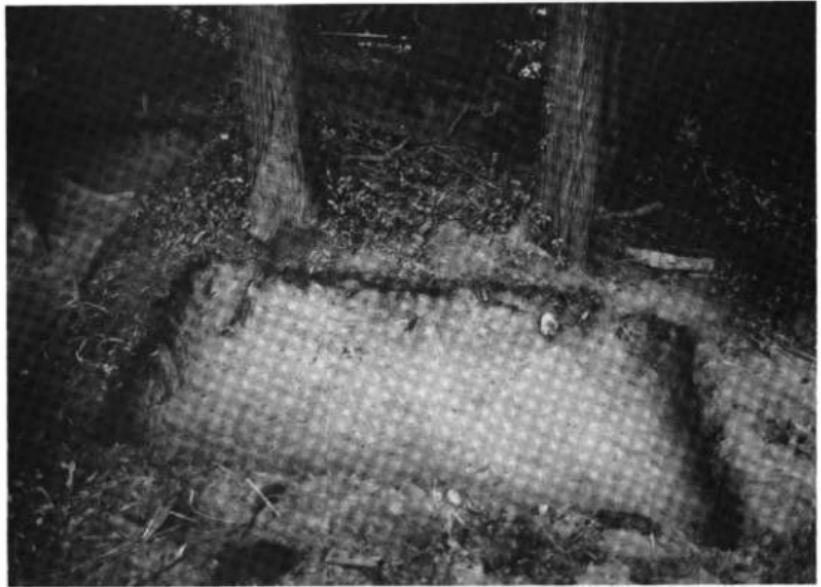
SK-47・SK-46（北から）



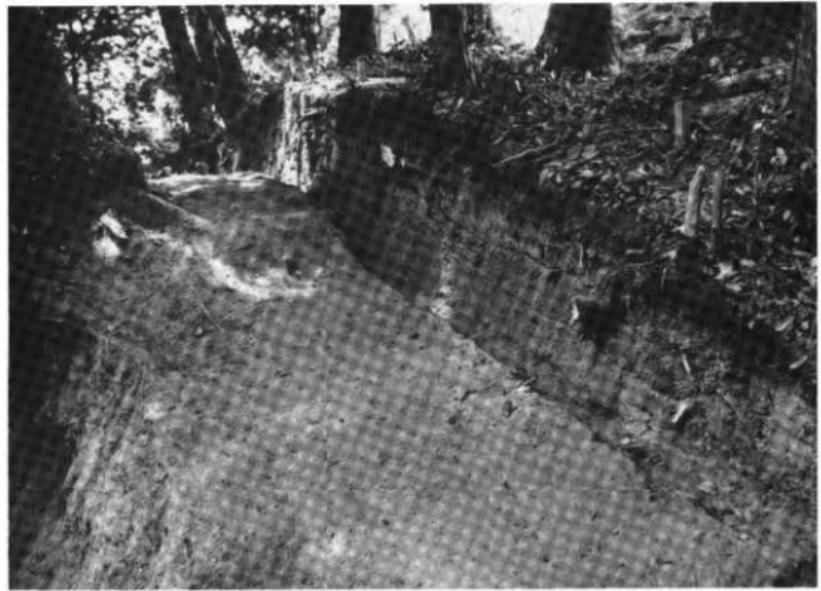
第2トレンチ全景（北から）



S K-48 (西から)



第3 トレンチ全景（北から）



第1 トレンチ土層断面（南東から）



第1トレンチ出土 須恵器



第1・第2トレンチ出土 獣形土製品



神木坂遺跡採集 須恵器

神木坂古墳群 III

橿原町文化財調査報告 第4集

1989年 3月31日

編集 橿原町教育委員会
発行 奈良県宇陀郡橿原町大字荻原164番地

印刷 共同精版印刷株式会社
奈良市三条大路2丁目2番6号